

“Impersonal It 文” の a generalized conceptualizer

湯本 久美子

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

キーワード: Impersonal It 文・A generalized conceptualizer・to 不定詞・
受動態・提示的 There 構文

要旨

本論では、認知文法の枠組み(Langacker (2011))に基づき、Impersonal *it* が指示的意味を持ち、“a generalized conceptualizer” を含意できることを、It を主語に持つ外置文と呼ばれる英語の文 (本論では Impersonal It 文と呼ぶ) において論証することを目的とする。この論証を Impersonal It 文の2つの語彙的特徴から試みる。第一の特徴は、不定詞を目的語にとり受動態で使われる “decide, hope, intend” 等の動詞で、これらの動詞は基本文には不可で Impersonal It 文のみ可能である (e.g. “*To short-list three of the candidates was decided.”, “It was decided to short-list three of the candidates.”)。この分析から、Impersonal It 文は動作主を低めた事柄の捉え方(actor defocusing)のみならず、事柄を一般化して捉えていることを伝えられる文であることを述べる。この事柄の一般化提示(a generalized statement)から Impersonal It 文では概念化者は自身を一般的概念化者(a generalized conceptualizer)として表すことができると考えられる。そしてこの見方の妥当性を第二の語彙的特徴、節主語文には不可で Impersonal It 文にのみ生起可能な“seem”等の動詞(e.g. “*That everything is fine seems.”, “It seems that everything is fine.”)についての議論により示す。この議論では提示的 There 構文との情報構造比較を取り上げる。

1. はじめに

本論の目的は “It” を主語とした文(1) (以後本論では 「Impersonal It 文」と呼ぶ) が示すことができる “a generalized conceptualizer” (一般化された概念化者) を論証することである。

(1) Impersonal It 文

Quirk et al. (1985:1392)

- (a) Type SVC: It is a pleasure *to teach her*.
- (b) Type SVA: It was on the news *that income tax is to be lowered*.
- (c) Type SV: It doesn't matter *what you do*.
- (d) Type SVO: It surprised me *to hear him say that*.
- (e) Type SVOC: It makes her happy *to see others enjoying themselves*.
- (f) Type SV_{pass}: It is said *that she slipped arsenic into his tea*.

(g) Type SV_{pass}C: It was considered impossible for anyone to escape.

上記(1)の文は、生成文法では「it-外置」(it-extraposition)と呼ばれる操作を経て生成されると説明されてきた。その名称は本来の主語である従属名詞節が後置され、その代わり主語の位置にある「It」が「仮主語」の役割を果たしていることによる。例えば、(1d)は“To hear him say that + surprised me.”が本来の語順であり(Quirk et al. (1985:1391-1392))、それが「外置」という操作により “It + surprised me + to hear him say that.”という語順へと変わっている。そして、主語位置にある “It”は意味の無い “a dummy subject”と考えられている(Huddleston & Pullum (2002:1403))。

“It”には意味が無いという意見に対して、Langacker は、“It”には意味があり指示的であるという Bolinger の主張 (ボリンジャー(1981:第 4 章))を一貫して支持¹している。Langacker (2007:180)では “It”に関する Bolinger の特徴づけをこれ以上改訂する必要はないと述べた上で、特定の対象を指示する代名詞である “It”がどのようにして最大限に不特定の指示性を持ちえるのかという問題提起をしており、この問題を解く鍵は「非境界性」と「曖昧性」にあるとする見通しを示している。そしてこの問題と取り組んでいる論文が Langacker (2011)であり、そこでは①関連構文との比較、②他の代名詞等との比較、そして③ “The control cycle”という基本認知モデルの 3 方向²からの分析を重ね合わせて “It”の意味を説明している。

この Langacker (2011)の主張の中で、本論が注目したいのは下記引用下線部分の非人称構文は “a generalized conceptualizer”、一般的概念化者を示す傾向があるという点である。

I thus propose, as a general characterization, the impersonal *it* profiles the relevant field, i.e. the conceptualizer's scope of awareness for the issue at hand. The conceptualizer may be identified as the speaker or some other specific individual, but – not surprisingly for impersonal constructions – it tends to be a generalized conceptualizer. What constitutes the relevant field varies with purpose and level of experience (e.g. physical, perceptual, social, epistemic), and while *it* evokes the field as an undifferentiated whole, certain facets of it may stand out as being especially relevant or most centrally and directly involved in the relationship profiled by the clause. Such entities offer themselves as specific interpretations for the referent of *it*. I suspect, however, the most schematic value predominates, such that *it* is maximally vague in reference. Imposing no delimitation on the field, in effect its referent is coextensive with it, or at least non-distinct. Langacker (2011:207) 下線は筆者による

¹ Langacker (1991(II):365) : Bolinger による “it”の説明-“ambience”または “all-encompassing environment”-はまさに正しい方向を示しており、 “the ‘ambient’ sense of *it* designates an abstract setting.”と付け加えるのみであると述べている。

Langacker (2000:42) : “I would argue, for instance, that the so-called ‘dummy’ or ‘expletive’ *it* represents an abstract, maximally schematic setting.”と述べている。

Langacker (2008:390) : “It’s raining.”/ “It seems that he lied to us.”の例文に続いて、指示対象が最大限に特定化されていないだけであり、“it”はその後に続く概念内容のベースとなる “scope of awareness” (意識のスコープ)を表していると説明している。

² Langacker (2011): ①に関しては焦点の交替現象を取り上げている。例えば、動作主の焦点・非焦点に関しては能動文と受動文及び他動詞文と自動詞文、参加者の焦点・非焦点に関しては場所主語文(e.g. “The garden is swarming with bees.”)等が挙げられている。②については、人称代名詞 we, you, they が特定の個人から不特定の人々を指示できる幅を持っていること、指示詞の指示の曖昧性等を示している。③については 2.2 節で説明する。

本論では Impersonal It 文が表現することができる一般的概念化者を Langacker (2011)では取り上げられていない言語事象—Impersonal It 文の語彙的特徴から論証する。

Impersonal It 文は主語が名詞句の場合には外置は不可 (e.g. “His silence worries me.”, “*It worries me his silence.”) であり、通常とは語順も異なり、かつ形式が複雑という点で有標である。しかしながら、以下に述べるようにある特定の動詞群の生起という点では基本の語順を持つ文(以後本論では「基本文」と呼ぶ)に比べて「無標」であり、本論ではこの特徴的な「無標」現象を取り上げることにより Impersonal It 文で表されている概念化者の姿を示す。

Impersonal It 文にのみ可能な動詞・動詞的イディオムとして Huddleston & Pullum (2002:1406-1407)は2種を挙げている。その第一の動詞群は不定詞を目的語にとり受動態で使われる “decide, hope, intend”等の動詞³である。例えば、“decide”は基本文(2)では受動化できず Impersonal It 文(3)が義務的である。

- | | |
|---|---------------------------------|
| (2) * <u>To short-list three of the candidates</u> was decided. | Huddleston & Pullum (2002:1406) |
| (3) It was decided <u>to short-list three of the candidates</u> . | Huddleston & Pullum (2002:1406) |

第二の動詞群として、“seem, appear, be, chance, come about, fall out, happen, strike, transpire, turn out” (“strike”のみ他動詞で他は自動詞)が挙げられている。例えば、“seem”は(4)の基本文は不可で Impersonal It 文(5)にのみに可能である。但し、“appear, seem, strike”は、叙述的な補語をとる場合には内容節を主語とすることが可 (“That Kim is ill seems obvious / strikes me as obvious.”)である。

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| (4) *That everything is fine seems. | Quirk et al. (1985:1392) |
| (5) It seems that everything is fine. | Quirk et al. (1985:1392) |

本論の構成は以下の通りである。

2 節では、(2-3)に示した不定詞を目的語にとる動詞の受動態を分析し Impersonal It 文の construal (解釈)を考えていく。2.1 節では受動態の特徴と不定詞の性質を比較することにより基本文で不定詞が受動態主語になりにくい理由を説明する。不定詞のスキーマ(ゲシュタルト・サマリー、非 “grounding”)と不定詞を取る動詞が示す傾向(精神活動表示と “figure/ground”の低非対称性)を取り上げる。2.2 節では不定詞を意味上の主語とする Impersonal It 受動文のメカニズムを考察することにより、この文が特定の actor を低めるのみならず一般化した事柄の捉え方(a generalized statement)を表せることを述べる。

3 節では、一般化した事柄の捉え方と概念化者の関係を議論する。3.1 節では先行研究である Langacker (2011)の概要を述べる。その主張を基として 3.2 節では Impersonal It 文の第二の語彙

³能動態で不定詞をとる動詞として “fall”, “remain”も挙げられているが本論では考察を行っていない。

特徴である動詞“seem”等を取り上げて概念化者の姿を追及する。まず、(4-5)で示した“seem”が同じく非人称構文である提示的 There 構文(6)に生起するのみならず、Impersonal It 文と提示的 There 構文は他にも共通点を持っていることから二つの構文の比較が有意義であることを示す。There 構文は、Langacker (2011:213)が Further prospects の中で “First, I have not considered ‘existential’ *there* and how it relates to impersonal *it*.”と今後の研究課題の一つとして挙げている事象である^{4/5}。

(6) There seems little doubt that the fire was started deliberately. Huddleston & Pullum (2002:1402)

本論では、二つの構文の情報構造の比較から、“discourse-new”という情報制約を持つ提示的 There 構文は「特定の談話における聞き手に対する対話者としての概念化者」を示し、一方、情報制約を持たない Impersonal It 文は「一般的概念化者」(a generalized conceptualizer)としての姿を示せることを説明する。

最後の4節は本論の分析結果をまとめ、Impersonal *it* が指示的意味を持ち、その意味の一つとして “a generalized conceptualizer”を含意することができるという結論を示す。

2. Impersonal It 文の construal

Impersonal It 文の統語的特徴について Quirk et al. (1985:1391)は、外置は名詞従属節 (subordinate nominal clauses)にほぼ専有的におこり、その中でも外置の最も重要なタイプは定形または非定形節によってあらわされる節主語であると述べている。非定形節の一つである動名詞節は基本文の方が一般的であることから(Quirk et al. (1985:1392-1393)), Impersonal It 文は不定詞節主語及び that 節主語が特徴的ということになる。不定詞節主語と that 節主語は両方とも主語・助動詞倒置が不可(7b-8b)のため疑問文の場合には Impersonal It 文が義務的(7c-8c)となり、この点において不定詞節主語と that 節主語は同じ振る舞いをする。

(7) 不定詞節主語 Huddleston & Pullum (2002:1406)

- (a) To pay now would be better.
- (b) *Would to pay now be better?

⁴Langacker (2022:214)は、フランス語 “Il existe des pneus qu'on a pas besoin de gonfler.”の英語訳 “There exist tires that don't need inflating.”(p.208)を示し “At present I can offer only the vague suggestion that *it* tends to be more abstract and more inclusive than *there*.”と述べている。フランス語では “il”が英語の “there”と “it”の両方に用いられる。

⁵もう一つの研究課題として Langacker (2011:213-214)が挙げているのは、分裂文 “It's in April that we go to Japan.”であり、“Here I suspect that *it* is more specific than just the relevant scope of awareness. I speculate that *it* designates an abstract “path of selection”, whereby one option is chosen from a range of conceivable alternatives.”と述べている。単に意識のスコープを指示するというより、より特定の働きを示しているのではないか、“It”は抽象的な選択の経路を表し、それによって可能な選択肢の中から一つが選択されるのではないかという意見である。

(c) Would it be better to pay now?

(8) That 節主語

Huddleston & Pullum (2005:247)

(a) That he was acquitted disturbs her.

(b) *Does that he was acquitted disturb her?

(c) Does it disturb her that he was acquitted?

しかし、受動文においては不定詞節と that 節には違いがある。That 節が基本文受動態の主語として可能である場合⁶は多々あるが(e.g. “That the President had arrived was reported by NHK.”)、不定詞節が基本文受動態の主語として可能なのは that 節に比べて極めて限られたケースである。

その限られたケースの一つが、下記引用の ia “Not to go would be considered rude.”である。Huddleston & Pullum (2002:1435)は不定詞が受動態または外置受動態の主語となりえるのは、その不定詞節が述語の補語と結び付けられている場合であり、他の節タイプではごく少ない連鎖動詞に限られかつ外置受動態形式の場合であると述べている。

Infinitival clauses can occur as subject or extraposed subject in passive clauses in which they are related to a predicative complement; in other types of clause, infinitivals are restricted to just a few catenative verbs (e.g. *decide, desire, hope, prefer*), and then only in extraposed position:

- i a. *Not to go would be considered rude.* b. *It would be considered rude not to go.*
- ii a. **To accept the offer was decided.* b. *It was decided to accept the offer.*
- iii a. **To receive more help was expected.* b. **It was expected to receive more help.*

Huddleston & Pullum (2002:1435)

そして二つ目のケースは、Dixon(2005:368)が “Full form” と呼ぶ “for” が加わっている形式である。Dixon(2005:368)は不定詞を (9) の 3 種に分類し、(9i) の “Full form” については “DECIDING, WANTING, LIKING” タイプのいくつかの動詞で受動化が可能であるとして (10) の例文を挙げている。

(9) Dixon (2005:368)による不定詞の 3 種

i. I chose for Mary to go. Full form

Dixon (2005:368)

⁶ 但し、that 節は基本文受動態の主語として常に可能ではない。That 節が表す内容の “grounding” の程度、詳述化の程度、そして本動詞の他動性質の程度によって容認度は異なるようである。Langacker (2008:432)は “Her mother expects [(that) she will graduate in June].” のような定形節を補部として持つ文について “passivization is generally very awkward, though not precluded altogether” と述べ、下記の例文を挙げている。

(1) ?*[That she will graduate in June] is expected by her mother. Langacker (2008:432)

(2) [That he would lose the election] was predicted by all the commentators. Langacker (2008:430)

(1) の不適格性について次のように述べている。これは(2)が適格なことからわかるように、主動詞が物理的ではなく心理的なプロセスを表しているから不適格というのではない。むしろ “predict” とは対照的に “expect” は命題的ランドマークを名詞的(nominal)というより関係的(relational)として解釈していることによるものである。この場合のランドマークはスキーマ的にグラウンドされたプロセスであり、具象化されていないものと理解されている。名詞的な目的語(nominal object)とは対照的に詳述されている定形節(an elaborating finite clause)は関係的補部であり、受動文の主語として適格ではない。

- | | | | |
|------|---------------------|----------------------|------------------|
| ii. | I chose Mary to go. | Reduced form | Dixon (2005:368) |
| iii. | I chose to go. | Further reduced form | Dixon (2005:368) |

(10) For John to receive the house and Mary the money was finally decided on.

Dixon (2005:368)

(9ii)は“Mary was chosen to go.”と目的語である“Mary”を主語にした受動態は可能である。
(9iii)に関しては挙げられている例文(11-12)は全て Impersonal It 文であり、可能な動詞は
“DECIDING, WANTING”であると述べている。

(11) It was decided to eliminate wastage.

Dixon (2005:368)

(12) It is hoped / planned / intended to complete these tasks today.

Dixon (2005:368)

そして Dixon (2005:368)は“They [本論の(9i)と(9iii)を指す] may be in principle, but seldom are in practice.”と述べている。不定詞は実際には基本文受動態の主語としてほとんど用いられず、Impersonal It 文が一般的ということになる。

このように Impersonal It 文でも不定詞を受動態の意味上の主語として持つことが可能な動詞は限られてはいるが、基本文にはほぼ見られない不定詞主語の絡む受動化は Impersonal It 文の大きな特徴の一つである。この現象を分析することは Impersonal It 文の construal を明らかにする一つの方法ではないかと考える。

以上の理由により、2 節では受動態と不定詞の関係から Impersonal It 文の construal を考察する。2.1 節では受動態の特徴と不定詞の性質を比較することにより不定詞がなぜ基本文で受動態の主語となりにくいのかを説明する。2.2 節では不定詞を意味上の主語として持つ Impersonal It 受動文のメカニズムから Impersonal It 文の construal を考察する。

2.1 受動態の特徴と不定詞の性質

本節では不定詞が基本文受動態の主語となりにくい理由を考察する。受動態を3つの角度から検討し不定詞の性質と比較する。第一は受動態の主語となれる要素の意味的性質、第二は受動態の機能、そして第三は受動態が焦点化する行為である。

第一点目の受動態の主語の性質については Bolinger (1974)、久野(1983)、Cureton (1979)、高見(1995)、Pinker (1989)等を概観することによりその動機づけを考える。

Bolinger (1974:67)は“affectedness”(被影響性)という概念を提示し、“……the hypothesis I propose is this: the subject in a passive construction is conceived to be a true patient, i.e., to be genuinely affected by the action of the verb.”と述べている。受動文の主語は、真の被動者であり、動詞の表す行為によって真に影響を受けていると考えられる。もし能動文の目的語

が真の被動者と考えられないなら、その能動文に対する受動文は不適格となる。受動文は、動詞が表す動作の主語への影響を表し、「被影響性」を帯びた要素のみが受動文の主語となれると説明している。

例えば、(13)と(14)は同じ他動詞 “approach”が使われているが両者の容認度は異なり、その相違が「被影響性」という点から説明されている。

(13) I was approached by the stranger.

Bolinger (1974:68)

(13)では動詞 “approach”によって表されている動作の被動者は主語の‘I’であり、動作主は私を目的として近寄ってくるので動作主と被動者の両者間には他動性がある。「私」は物乞いや気味の悪い人等の見知らぬ人に近づかれることによって心理的に圧迫を受け、影響を及ぼされる。見知らぬ人が「私」に近づいてくるという行為は「私」を直接対象としており、「私」に対して何か影響が及ぼされるという解釈が可能なのでこの文は適格である。

(14) *I was approached by the train.

Bolinger (1974:68)

一方、電車が「私」に近づいてくるというのは電車が自律的に行う動作であり私を目的に近づいてくるのではない。「私」はその動作の直接対象ではない。(14)では動詞と目的語との間に他動性が認められずそこには両者が存在する位置の関係をしめす空間性(spatiality)があるだけである。目的語「私」は被動者ではなく、場所(location)を示すにすぎず影響を受けないためこの文は適格ではない。

Bolinger の「被影響性」よりゆるやかな概念を提示しているのが久野(1983)である。久野(1983:202)は、非文となる英語受動文(16)について「英語の例に共通して言えることは能動文の目的語が、動詞の表す動作を直接的に受けない、ということである。例えば、quit, enter, leave, graduate from が表す動作は、その目的語を直接的に巻き込まない、主語の自律的な動作である。」と述べている。

(15) John entered the University of Hawaii in 1960.

久野(1983:201)

(16) *The University of Hawaii was entered by John in 1960.

久野(1983:201)

そして久野・高見(2002:212)、高見(1995:71)では「インヴォルヴ」(involve・関与)という概念を提示している。英語の受動文が適格となるのは、能動文において、その他動詞が表す行為や状態に目的語がインヴォルブしている場合、言い換えれば、他動詞が表す行為によって目的語に何かがなされたということが示されている場合である、と述べている。インヴォルヴという概念は、後に「ターゲット」という概念としても説明されており、久野・高見(2005:2章)で

は「相対的ターゲット性制約」が提示されている。「インヴォルブ」・「ターゲット」は「影響」を含む上位概念と考えられ、Bolinger の「被影響性」では説明できない(17)を説明できる。

(17) Mary is loved by John.

メアリーがジョンに愛されていることによってメアリーが影響を受けているかどうかは、必ずしも明瞭ではなく、「被影響性」では説明できない。しかし、主語メアリーはジョンの愛情のターゲットであり、メアリーに対して何かがなされていると解釈することが可能である。

「被影響性」や「インヴォルブ」・「ターゲット」では説明が難しい(19)のような自動詞による疑似受動態を説明することができるのが Cureton (1979) が提示している “Quality” (特性) である。能動文がこれに対応する受動文を持つのは「能動文の目的語名詞句について、何か重要な特性を推論できる場合に限る」として “implied quality prediction hypothesis” (特性推論の仮説) を主張している。この仮説は高見 (1995) による “characterization” (特徴付け) と同じ考え方である。

(18) *John was traveled with by Mary.

高見(1995:55)

(19) John can be traveled with by anybody, since he is so likable.

高見(1995:55)

(18)のメアリーがジョンと一緒に旅行したという事実は、ジョンの特徴や性質を記述するものではないので不適格文である。一方、(19)のジョンは誰にでも好かれるので、彼は誰の旅行相手にもなりうるという記述は、ジョンの特徴や性質を示しているので適格文である。

しかし、「特徴付け」では “John was given a chair.” や “Mary is loved by John.” は説明できない。なぜならば、単に椅子が与えられたからといって、それがジョンを「特徴付ける」こともないし、メアリーがジョンという一個人に愛されているからといってそれが「特徴付け」にはならないからである。

そこから高見(1995:71)では、“Hierarchy” (階層性) による説明が示されている。この階層では “involvement” が基本になっている。SVO 構文で、直接目的語は、通例、動詞の表す動作や状態の直接対象であり、直接目的語に対して何かがなされたと解釈されやすい。従って「関与」は受動文の基本である。「関与」を遵守、または違反した場合に「特徴付け」の制限が機能するという考え方である。

これらの先行研究から、受動文の典型的な主語は、動詞が示す行為の直接の対象または特徴づけが可能な対象と考えられ、そこから受動文の主語は高い具象性と特定性によって動機づけられていると思われる。この高具象性そして特定性という特徴は、Pinker (1993:91)による受身規則— “X is in the circumstance characterized by Ys acting on it (more generally, the circumstance for which Y is responsible)—とも矛盾するものではないと考える。

次に不定詞の性質を見ていく。Langacker (2008:433)は補文節の議論の中で下記の例文(20-23)を挙げている。

- | | |
|---|----------------------|
| (20) The organizers fully expected those problems. | Langacker (2008:430) |
| (21) The organizers fully expected [to encounter those problems]. | Langacker (2008:430) |
| (22) Those problems were fully expected by the organizers. | Langacker (2008:430) |
| (23) *[To encounter those problems] was fully expected by the organizers. | Langacker (2008:430) |

そして、非文である(23)を挙げて“..... passivization is usually not just marginal but unacceptable as in (33)(d).[本論の(23)を指す]”(p.433)、受動化は通常不可であると述べている。その不可の理由(Langacker (2008:433))を次のように解釈できるだろう。

まず、不定詞補部による概念的具象化(conceptual reification)の可能性は(That 節に比べて)より少ない。なぜならば不定詞補部は出来事の記述として用いることができるほどにはそのみでは充足していない。例えば “The painters expect [to finish on time].”(p.432)の “to finish on time”は “grounding”と明示的な主語が欠如しており、その現実性が評価の対象となるような特定の出来事を示していない。主節との統合によってより特定解釈が生まれると述べている。従って、(23)の不定詞句 “To encounter those problems”も“grounding”されておらず、明示的な主語も欠如しており、非特定のイベントを表しているにすぎないということになる。一方、上述のように、受動文の主語には動詞が表す行為による受影性を持つ要素や関与や特徴付けの対象になれるだけの高い具象性・特定性の動機付けが求められるのが典型である。(23)の不定詞句にはその動機づけとなる具象性・特定性が十分でないことからその現実性は 受動態という形式では“expect”という判断の対象とはならないことになるだろう⁷。

従って、“grounding”されていない不定詞が示す不十分な具象性・特定性が受動文の主語となりにくい第一の要因と考えられる。

第二に、Shibatani (1985)と Langacker (1991 (I))が述べている受動態の機能と不定詞を目的語にとる動詞との関係を見ていく。

Shibatani(1985)は、受動態の働きについて、動作主の姿を低めるものであり、実際多くの受動態は斜格 by 句を言語化しない(p.831)と述べている。不定詞については、それを目的語にとる動詞に共通する性質、そして動作主・経験者の特徴は明らかにってはならず不明な点が多い。ただ、その中でも、若干の傾向がうかがえるように思われる。例えば、(24)の不定詞部分の意味上の主語が主節主語 “John”と同一指示的なことから生成文法では “decide”等の(25)の動詞は「主語コントロール動詞」と呼ばれている。栗原・松山(2001:75)は「これらの動詞の

⁷ 2 節冒頭で挙げた Dixon(2005:368)による“Full form”の(10) “For John to receive the house and Mary the money was finally decided on.”は、“For John”によって 具象化されていることから受動化が可能になっているという説明が可能かもしれない。

ほとんどは、補文内容の実現に関して、主語の意思(volition)や意図(intention)を表しているものである。」と述べている。

(24) John decided to resign from his position.

栞原・松山(2001:75)

(25) 主語コントロール動詞 : agree, attempt, begin, bother, cease, choose, condescend, continue, decide, demand, decline, design, endeavor, fail, forget 他

栞原・松山(2001:75-76)

下記の Dixon(2005:368)の主張は、上述の主語の意志や意図の表出という動詞の傾向を踏まえてのことと思われる。不定詞を取る動詞の多くが主語の意志や意図を表出する精神活動動詞であることから、主語を defocus する受動態の機能と一般的に一致しないという見方である⁸。

A Modal (FOR) TO complement describes the complement clause subject getting involved in an activity, but also carries a sense that the subject of the main clause wanted it to happen; in view of this, the transitive subject is seldom open to demotion in passive.

Dixon (2005:368) 下線は筆者による

一方、精神活動動詞の性質と受動態の機能の関係について Langacker (1991 (I):234)は別な角度からの説明を与えている。下記は physical motion / action verbs との対比として述べられている。

In contrast, verbs of perception and mental or emotional attitude provide less basis for an intrinsic figure / ground asymmetry (for example, does a viewer's gaze move towards a perceived object, or does a visual signal travel from the object to the viewer?); the choice of subject is consequently more flexible and depends on the image selected to structure the scene. Opposing pairs such as *like* vs. *please*, *think about* vs. *preoccupy*, *see* vs. *be visible to*, etc. are quite common in these domains, but comparable lexical oppositions for verbs of asymmetrical physical activity are unusual. Moreover, since a primary function of the passive construction is to permit a marked choice of subject (for discourse purposes), we can expect this construction to be most deeply entrenched with prototypical action verbs where natural figure/ground alignment has the strongest effect in dictating a particular selection. This certainly appears to be case.

Langacker (1991 (I):234)

知覚・精神活動動詞の場合、内在的に figure と ground の非対称性が身体的活動動詞のそれより薄い。例えば、知覚の場合、「見る人」が対象物を見るのか(see)、それとも「対象物」が見る人の目に入ってくるのか(be visible to)という動詞の選択の幅が残されている。一方、身体的活動動詞の場合は figure と ground の非対称性が強いいため、そのような選択は一般的ではない。

⁸非文である(23)を人主語文にすると “The organizers fully expected to encounter those problems.”となり、Dixon (2005:368)の説明に従うと、そう期待している “The organizers”が重要な部分でありこの部分を demotion することは適切ではないということになる。

(23) *[To encounter those problems] was fully expected by the organizers. Langacker (2008:430)

そして受動態の第一機能は有標の主語の選択にある。通常は ground と解釈されるモノにあえて主語として際立ちを与えるのが受動態の第一機能である。従って、figure と ground の非対称性が強い身体活動動詞はこの受動態の機能と一致し定着をしている。この説明から、非対称性の弱い知覚・精神活動動詞は受動態の機能にそぐわないことがうかがえる。

これらの分析は、受動態の機能と不定詞を取る動詞の性質が相いれがたい傾向にあることを示しており、この点が、不定詞が受動文の主語となりにくい第二の要因であると考えられる。

第三として、受動態が表わしている行為を見ていく。Langacker (1982)では受動態が能動態からの派生ではないこと、文法的要素と言われる "be"、"by"、そして過去分詞形態素には意味があること、そして "by"の目的語は単に "by"の目的語であり、能動文の主語から降格されたものではないことを主張している。その上で、[PERF]というシンボルで表されている "the participial predicate" (分詞) を相という観点から3種の variants [PERF1~3]に分類しており、受動態があらわす行為が示されている。Langacker (2002:3.1 節) "The perfect participle" でも同じ説明をしており、下記は Langacker (2002:129-135)からの例文である。

[PERF1](26-28)はプロセス全体をベースとしてはいるが、プロセスで起こった結果状態・最終状態を表す。[PERF1]は、動詞ではなく、形容詞の一種である状態的關係を表す。

[PERF1]

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| (26) My wrist is all swollen. | Langacker (2002:129) |
| (27) Janice is gone. | Langacker (2002:129) |
| (28) The side walk is cracked. | Langacker (2002:129) |

[PERF2](29-34)は[PERF1]と同じように状態または場所の変化概念を喚起する。しかし[PERF2]は二つの参与者間のプロセスをベースとして持つことにより、[PERF1]より複雑な構造になっている。二つの参与者の内の一つがトラジェクターであり、もう一つの参与者であるランドマークに変化を引き起こす力行使する。[PERF2]はこの変化の最終結果のみを表し、変化を経る参与者をトラジェクターとして選択する。[PERF2]は[PERF1]と同じように、形容詞の一種であるが、[PERF1]とは異なる点がある。それは[PERF2]の場合は、ベースにおけるランドマークが[PERF2]においてはトラジェクターとなる不一致である。例えば、(29)の場合、ベースにおいてのランドマークである目的語 "that watch you bought" が 受動態では主語・トラジェクターとなる。

[PERF2]

- | | |
|--|----------------------|
| (29) That watch you bought is probably stolen. | Langacker (2002:130) |
| (30) The cathedral is totally destroyed. | Langacker (2002:130) |
| (31) This slipper is all chewed up. | Langacker (2002:130) |

- (32) My arm was (so) burned (I could hardly move it). Langacker (2002:131)
 (33) The town was (already) destroyed (when we got there). Langacker (2002:131)
 (34) The infield was covered with a tarp (all morning). Langacker (2002:132)

[PERF3](35-37)が受動態である。[PERF2]と[PERF3]はベースに対して何をトラジェクター、ランドマークにするかという点では一致している。異なる点は[PERF3]、つまり受動態は最終状態のみではなくプロセスが経るすべての過程を表していることにある。それは[PERF2]の例文の括弧と[PERF3]の括弧の要素が異なっていることで示されている。[PERF3]の括弧内要素は[PERF3]がプロセス全てを表していることを示している。但し、[PERF3]はベースとは異なり“atemporal”であり、従って“nonprocessual”である。

[PERF3]

- (35) My arm was burned (as soon as I reached into the fire). Langacker (2002:131)
 (36) The town was destroyed (house by house). Langacker (2002:131)
 (37) The infield was covered with a tarp (in five minutes). Langacker (2002:132)

この説明から、真の受動態は動詞が表すベースプロセスの最終段階に焦点をあてつつも全ての行為段階が表現可能であり、かつそれらの全ての段階は非時間的にプロファイルされており、その意味で非プロセス的である。

一方、不定詞について Langacker (2002:78)は“atemporal relations”(非時間的關係)を表すカテゴリーであると主張しているのみならず、“The corresponding atemporal relation employs summary scanning for the same series of state.”(p.80)と述べている。つまり不定詞があらわす非時間的關係とは一続きの状態を一括して捉えることを意味する。不定詞はベースとして動詞が表すプロセスを持っているが、そのプロセスを連続スキャンニングとして捉えることを停止させ、一つのゲシュタルト・サマリーとしてプロファイルしている。

Langacker による受動態と不定詞の定義を重ねあわせると次の不一致が見えてくる。Langacker が真の受動態であるとしている行為の過程をも表わせる[PERF3]の場合、例えば(36)では主語である「町」という一塊を細かく「各家々が破壊されている変化」として表すことができる。しかし、ゲシュタルト・サマリーを表す不定詞は事柄を一塊としてしか示めすことができず、[PERF3]とは一致しない。このずれが不定詞が受動文の主語となりにくい第三の要因と考えられる⁹。

⁹ この不一致を踏まえて、2 節冒頭で示した Huddleston & Pullum (2002:1435)が挙げている不定詞主語が可能になる受動文(1として次に示す)については、認知文法の枠組みでは以下のように説明できるかもしれない。

(1) Not to go would be considered rude. Huddleston & Pullum (2002:1435)下線は筆者による不定詞 “Not to go”は動詞の目的語であり、“rude”は目的格補語である。(1)を人主語文にしてみると “X would consider not to go rude.”となる。この形式は例えば、“We consider Shakespeare a great poet.”と同じである。

本節では受動態説明の鍵となる3つの要素（主語の意味的性質、受動態の機能、そして受動態が焦点化する行為）を不定詞の性質と比較した。その結果、“grounding”されていない不定詞の低特定性・低具象性とゲシュタルト・サマリー性が受動文の主語として相いがたく、そして不定詞を目的語に取る動詞が示す一つの傾向—精神活動表示そして figure/ground の低非対称性—が受動態の機能と一致しにくいことを述べた。

2.2 Impersonal It文の construal: “actor defocusing”・“a generalized statement”

本節では Impersonal It 文がどのように受動態と不定詞の相いれない性質を組み入れているかを見ていくことにより、この文の construal を考察する。

まず、“grounding”されていない不定詞には受動態の主語を動機づけている高い具象性・特定性が欠けているが、その欠如を補っているのが “It”ではないかと考える。Langacker は “It” の持つ場面との繋がりを随所で主張している。Langacker (1991(II):365)では “an abstract setting”、Langacker (2000a:42)では “an abstract, maximally schematic setting”、Langacker (2011:205)では “the global, all-encompassing surroundings”と説明されている。さらに、具体的な場面設定のみならず、“It”は “scope of awareness” また “field” (Langacker (2011:206)) と呼ばれる認知的枠組みをも示す。従って、“It”は発話場面や発話時の意識の枠組みを示す働きをし、その枠組み機能が不定詞に欠如している “grounding”に代わり発話場面との接点を与えていると考えられる。

この “It”が発話場面と深く繋がっていることは、発話における指示代名詞としての “It”の働きからも示すことができる。情報構造を議論している Gundel et al. (1993:279-280) は “It”は “In focus”を表すとし、“In focus”とは短期記憶のみならず、現在の attention の中心にあるものを焦点化している場合と説明している。そして焦点化されているものは一般に先行する発話の話題を少なくとも含み、それと同時に後続する発話の話題であり続けるものを含んでいると述べている。また、発話者側の情報構造から “It”を見ている Kamio & Thomas (1998:291)は、“It”は “prior knowledge to the speaker”であると述べている。“Prior knowledge”とは典型的に話し手が会話に入る前にすでにアクセス済みの情報を指し、話し手の知識の中核に入り込んでいる中心的な情報あるいは処理済み情報(already learned)のことである。

このように、指示代名詞としての “It”は構築済みの発話の場と深く関係しており、この性質が Impersonal It 文にも同様の機能をもたらしていると考えられる。Impersonal It 文を用いることにより、発話との結びつきがもたらされ、そのことにより不定詞があらわす事柄の具象性・

この場合、“Shakespeare”全体が一つのまとまりとして捉えられ、それが “a great poet”とイコールであると述べられており、“Shakespeare”はゲシュタルト・サマリーと類似の性質を示している。同じことが(1)の “Not to go”についてもいえるだろう。そこから(1)は Langacker(1982/2002)が示している[PERF]分類から見ると[PERF2]に相当する。行為過程は表されておらず、ベースにおいてのランドマークである目的語 “Not to go”がトラジェクターとなっている。従って、(1)は真の受動態[PERF3]では無いということになる。

特定性が高くなると考えられる¹⁰。

次に、受動態の機能である動作主を低める性質と不定詞をとる動詞が示す actor 提示の不一致が Impersonal It 受動文で緩和されることから、Impersonal It 文は動作主の姿を低めた捉え方 “actor defocusing” と密接に関係していると考えざるをえないだろう。そして下記に挙げる Langacker (2011)そして Dixon (2005)による分析は概念化者が動作主を低めて捉えることができる場合に Impersonal It 文が可能であることを示している。

まず、Langacker (2011:198-203)による “The control cycle” という一般的認知モデルからの説明を見る。このモデル(p.198)は Baseline > Potential > Action > Result で構成されており actor がターゲットをどのように認識し対応するかを表しているものである。静的な状態である Baseline では、actor はその領域を集合的に構成する “an array of entities” をコントロールしている。第二フェーズである Potential では、あるターゲットが “scope of potential interaction” (actor による潜在的相互作用の範囲) である “actor’s field” に入る。この状態は緊張を生じさせる。なぜならば actor はそのターゲットをなんらかの方法で処理しなければならないからである。第三フェーズの Action における典型的な処理方法は、そのターゲットを actor のコントロール内にいれることである。そのアクションの結果として、最後の第四のフェーズ Result では再びより静的な状態に戻る。

Epistemic level (認知的レベル) におけるこの認知モデルと命題的知識の獲得に関する述語とを対応させると、actor は概念化者、ターゲットは命題、そして領域は概念化者の現実性についての視点 (認識領域) を意味する(p.199)。

そして 第二フェーズの Potential はさらに3つのステージ Formulation ・ Assessment ・ Inclination に分割されている(pp.200-201)。Formulation は命題が単に概念化者の意識フィールドに入り、それは拒否できないものであり、なんらかの処理をしなくてはならない段階。動的な Assessment を経て、その命題を受け入れる、また拒否するというなんらかの初期的傾向を示す段階である Inclination に達する。下記の表は Langacker (2011:1200)に基づき、この認知モデルとそれに対応する述語をまとめたものである。但し、この表では動詞は全て原形で示している。

¹⁰ “It” による枠組みにはもう一つの効果があるのではないだろうか。不定詞を取る “decide, hope, intend” 等の精神活動動詞はそのままでは figure/ground の非対称性が低いが、“It” によってマークされることにより非対称性が高まるのではないだろうか。これは推測にしかすぎず検証が必要であるが、It 分裂文との構文的類似性が影響を及ぼしているのではないかと考えており、今後の研究課題としたい点である。

表 1 Langacker (2011: 200)に基づく "The control cycle" 認知モデルと対応述語

Baseline >	Potential >			Action >	Result
	Formulation	Assessment	Inclination		
	possible	wonder	suspect	learn	know
	conceivable	consider	believe	discover	believe
	plausible	ask	suppose	decide	think
	feasible	be unsure	think	conclude	realize
	imaginable	be undecided	figure	realize	accept
		be unclear	reckon	determine	is sure
				find out	is certain
				figure out	is convinced

そして Langacker(2011:201-202)は、**Assessment**の一部の行為と **Action**は人主語を要求し、**Formulation**を表す述語は常に Impersonal It 文が用いられ、人主語は用いられないように思われると述べている。

Langacker (2011:200/202)で示されている認知段階を示す述語を人主語文・It 文の別で整理したのが下記の例文(38-42)と表 2 である。

(38) **Formulation**

(a) *We are {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us. Langacker (2011:202)

(b) It is {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us. Langacker (2011:200)

(39) **Assessment**

(a) Albert {wondered / considered / asked} whether aliens had stolen his shoes. Langacker (2011:202)

(b) *It {wondered / considered / asked} whether aliens had stolen Albert's shoes. Langacker (2011:202)

(c) It is {unclear} whether mosquitos have souls. Langacker (2011:202)を修正¹¹

¹¹ (39c), (40b), (42b)の原文は下記に記載のとおり。これらは to 句の付加について議論している箇所での例文。(39c), (40b), (42b)は非文となる述語及び to 句を削除している。

(39c) It is {unclear / *arguable / *uncertain / *unsure / *undecided} to me whether mosquitoes have souls.
(40b) It {seems / appears / *is doubtful / *is likely / *is dubious} to me that she has enough money to buy Microsoft.

(42b) It is {apparent / evident / obvious / *certain / *definite / *true / *undeniable} to me that Croatia is destined to be the world's next superpower.

(40) Inclination

- (a) I {suspect / believe / suppose / think / figure / reckon} they will never agree to my offer.

Langacker (2011:200)

- (b) It {seems / appears} that she has enough money to buy Microsoft.

Langacker (2011:202)を修正

(41) Action

- (a) Albert {learned / decided / discovered} that aliens had stolen his shoes. Langacker (2011:202)

- (b) *It {learned / decided / discovered} that aliens had stolen Albert's shoes.

Langacker (2011:202)

(42) Result

- (a) He {knows / believes / thinks / realizes / accepts / is sure / is certain / is convinced} that Bush is a pacifist. Langacker (2011:200)

- (b) It is {apparent / evident / obvious} that Croatia is destined to be the world's next superpower.

Langacker (2011:202)を修正

表2 Langacker (2011:200/202)に基づく“The control cycle”と可能な文タイプ

能動文 可○・不可×	<u>Potential</u> >			<u>Action</u>	<u>Result</u>
	<u>Formulation</u>	<u>Assessment</u>	<u>Inclination</u>	>	
(a) 人主語文	×	○	○	○	○
(b) Impersonal It 文	○	×○	○	×	○

事柄を認識し処理する actor は Base line から Result の全ての段階で必ず存在しているが、この表はその精神活動の活発さの程度によって人主語または Impersonal It 文が選択されていることを示している。活動が低い場合には Impersonal It 文、高い場合には人主語文というおおよそのすみわけが見られる。そして興味深いのは Inclination と Result では二つの文タイプが可能な点である。この現象は同じ一つの事柄について actor による精神活動を低く捉える場合には Impersonal It 文、高く捉える場合には人主語文を用いることができ、Impersonal It 文の選択は actor の “defocusing” という事柄の解釈(construal)を表していると考えられる。

この Impersonal It 文が表す “actor defocusing” を支持する言語事象として、Dixon (2005:368) が挙げられる。Dixon (2005:368) は (43-45) の例文を挙げ、行為を行う actor (“order” の対象となる聞き手 “the firing squad”) が含まれている場合 (45) には、It 外置主語受動態は不可となると述べている。Actor が言語化されているということは “actor focusing” を示している。それが Impersonal It 文と一致しないということは、この文自体が “actor defocusing” という “construal” を表わしていると考えられる。

(43) It has been ordered that all prisoners should be shot at dawn. Dixon (2005:368)

(44) The firing squad has been ordered that all prisoners should be shot at dawn.

Dixon (2005:368)

(45) *It has been ordered the firing squad that all prisoners should be shot at dawn.

Dixon (2005:368) 下線は筆者による

この Impersonal It 文の “actor defocusing” という construal が不定詞をとる動詞が持つ actor (動作主/経験者) 提示の緩和に関与していると考えられる。しかしながら、actor を低めた construal を伝えるという目的のためだけならばあえて不定詞を選択せず他の形式を用いて表現することができる。複雑な形式を持つこの Impersonal It 受動文には “actor defocusing” 以上の働きがあるはずである。そしてそれが 2.1 節で述べた不定詞の性質である事柄をゲシュタルト・サマリーとして示すことによる総称性・一般化表示(a generalized event / a generalized statement)なのではないかと考える。

この点についてもう一つの非定形である動名詞の振る舞いが参考となる。Quirk et al. (1985:1392-1393)は、節主語を持つ文は一般的に外置されるが、例外として “-ing” 節はそのままの形式で通常の主語の位置を占めるのが自然であり、“-ing” 節の外置は一般的ではないと述べている。従って、非定形という同じ性質を共有している動名詞主語基本受動文と不定詞を意味上の主語にもつ Impersonal It 受動文の働きには平行性が考えられる。

そして動名詞主語受動態について Huddleston & Pullum (2002:1435)は、この形式は一般的ではなくかなりの数の動名詞を補部とする連鎖動詞はそれの受動化を許さないと述べた上で、可能な場合について次のように説明している。

Passives with gerund-participial subjects are uncommon; a fair number of catenative verbs that take complements of this form do not allow passivisation. Compare:

[29] i. Taking out a mortgage wasn't considered / recommended / suggested.

ii *Painting the house was begun / kept / hated / intended / remembered by Sam.

Note that there is a difference in the interpretation of the corresponding actives. In *Sam remembered painting the house* the understood subject of *paint* is recovered from the matrix clause: it was Sam who painted the house. In *Sam recommended taking out a mortgage*, however, the subject of *take* is not specified syntactically but has to be contextually recovered. It is this type of gerund-participial construction that most readily allows passivisation.

Huddleston & Pullum (2002:1435)

“Sam remembered painting the house.” の “painting the house” は主語のサムの行為であると解釈され、この文を受動化すると非文となる。一方、“Sam recommended taking out a mortgage.” の場合は、“taking out a mortgage”の行為者は統語的には特定されず、コンテキストからの解釈になる。そしてこのタイプの動名詞・分詞構文が受動化を許される場合が多いと述べている。従って 下記の受動文(46)はこの文のみからは「税金の支払い」を行う動作主が特定できないという文ということになる。一般化された「税金の支払いというものは」という意

味が可能であり、その場合、(46)は“a generalized statement”と解釈されることになる。

(46) Paying taxes can't be avoided.

Huddleston & Pullum (2002:1434)

そしてこの動名詞について Langacker (1991(II):26)は下記のように述べ、不定詞と同じくゲシュタルト・サマリー性質を持っていると説明している¹²。冒頭の“these nouns”は“Derived nouns like walking, complaining, sleeping, etc.”を指している。

The fact that these nouns are derived by *-ing*, which also appears in the progressive construction, provides a clue to their semantic analysis. I have argued elsewhere (1987b) that the progressive *-ing* does three things to a perfective verb stem:

- (1) it construes the event holistically (by suspending a sequential scanning);
- (2) it confines the profile to an immediate scope of predication consisting of an internal series of component states; and
- (3) it construes these states at a level of abstraction that neutralizes their differences.

Langacker (1991(II):26)

特定の動作主の姿を低め事柄をゲシュタルト・サマリーとして提示するということは、その事柄が持つプロセスを消し去り、プロセスが消され均質のものと見なされることにより個性を失い、その事柄は総称性を示すようになる。不定詞についても Langacker (2008:433)は、“The painters expect [to finish on time].” (p.432)の “to finish on time” について不定詞補部のみでは特定の出来事を示していないと本文で述べた上で、注として “However, the clause can be reified as another sort of abstract entity - namely, an event type figuring in general statements (e.g. To finish on time is always desirable).” と不定詞の総称的解釈を指摘している。

従って、動名詞と同様にゲシュタルト・サマリーを示す不定詞を意味上の主語に持つ Impersonal It 受動文にも事柄を一般化して示すという働きがあると考えられる。

本節では不定詞を意味上の主語に持つ Impersonal It 受動文の construal を考察した。不定詞に欠けている発話と発話の場を繋ぐ “grounding” 性質は “It” の持つ “field” で補われていること、この文は、特定の動作主を低め(actor defocusing)、事柄を一般化した construal (a generalized event / a generalized statement)を表していることを述べた。1節で述べたように、基本受動文では不定詞は主語とほぼなれず、Impersonal It 受動文が一般的であり、この現象は Impersonal It 文を特徴づけている。そこからこの現象は Impersonal It 文自体に「一般化表示」という性質があり、その性質と呼応することにより、不定詞主語の受動文が可能になっている

¹² Walking 等の派生を示す “-ing” は進行形にもみられるものであり、この “-ing” が意味分析の鍵である。“-ing” は perfective verb の語幹に3つの性質を与える：(1)連続スキャンニングを停止させることによりイベントの全体的解釈を課す、(2)内部に一連の構成要素状態を持つことで成り立っている述語の直接領域にプロファイルを制限する、(3)内部にある一連の構成要素状態はそれらの違いを無効とする抽象レベルとして解釈される。

ことを示唆していると考えられるのではないだろうか。

3. Impersonal It文の “a generalized conceptualizer”

前節では不定詞を意味上の主語として持つ Impersonal It 受動文を分析した結果、この文は特定の動作主を低め事柄を一般化した construal (a generalized event / a generalized statement)を示すことを述べた。この construal は Impersonal It 受動態のみならず Impersonal It 文自体が持つ性質と呼応しているのではないかと考える。そして事柄を一般化して提示しているということは、事柄を捉えている概念化者自身についても「自分のみならず皆も同じくそう捉えている」という “a generalized conceptualizer”として自身を示しているのではないだろうか。本節では 3.1 節で Langacker (2011)による分析を示した後、3.2 節で Impersonal It 文のみに可能な第二群の動詞である “seem”等を取り上げ、提示的 There 構文との情報構造の比較から Impersonal It 文の概念化者の姿を考察する。

3.1 Langacker (2011) による分析

本節では次節での論証のベースとなる本論の先行研究である Langacker (2011)を概観する。Langacker (2011:203)は話し手を主語とする文(47)と Impersonal It 文(48)を比べて次のように述べている。

(47) I am certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

Langacker (2011:203)

(48) It is certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

Langacker (2011:203)

(47)は “I”を主語に選択することにより、認識的判断の責任が話し手にあることをハイライトしている。一方、(48)は Impersonal *it* を使うことにより、話し手はスポットライトを避け、責任は特定されていない状況にシフトされ、そこではどの概念化者も同じ評価に到達するであろうとされている。話し手が究極の責任を負っているのは確かであり、“certain”と述べている命題の正当性を理にかなったように否定することもできないのも真である。しかしながら、話し手の役割は “defocus”され、暗にその事柄を考えるであろう誰にとってもそれはそうなのだという姿でオフステージに留まっているのである。そこから(48)は “a generalized conceptualizer”を含意していることになる。

この主張の根拠は命題を認識的コントロールする段階において特定の認識者と一般的な認識者の二つの言語化が可能な場合があることである。下記の例文(49-52)は Impersonal It 文に用

いられる述語の中には“to 句”を付加することにより概念化者を特定することを許すものがあるということを示している。

- (49) **Formulation**: It is {conceivable / plausible / *possible / *feasible / *imaginable} to me that we could do it without getting caught. Langacker (2011:202)
- (50) **Assessment**: It is {unclear / *arguable / *uncertain / *unsure / *undecided} to me whether mosquitoes have souls. Langacker (2011:202)
- (51) **Inclination**: It {seems / appears / *is doubtful / *is likely / *is dubious} to me that she has enough money to buy Microsoft. Langacker (2011:202)
- (52) **Result**: It is {apparent / evident / obvious / *certain / *definite / *true / *undeniable} to me that Croatia is destined to be the world's next superpower. Langacker (2011:202)

各例文冒頭に記載してある **Formulation** 等は 2.2 節で紹介した “The control cycle” (epistemic control)を示している。(49-52)の例文に基づき、Impersonal It 文の特徴は、命題についての認識的判断の責任を特定の概念化者に負わせることなく文が成立するという点にある、と述べている。なぜならば、“to 句”の付加が可能な場合には常にその付加はオプションであり、“to 句”の付加は必須要素ではない。このことから、Impersonal It 文は “a generalized conceptualizer”を喚起し、この文が含意しているのは、命題を判断する立場に立つ人ならだれでも同じ評価 (assessment)をするだろうということである。“to 句”が付加された場合にはそれが指しているのは常に話し手でありその命題に対する究極的判断の責任を負う立場にある。しかし、Impersonal It 文が示す “a generalized conceptualizer”とその話し手の立場は矛盾するものではなく、話し手も “generalized conceptualizers”の一人として示されていると説明している(p.202)。

この主張をさらに裏付ける例文として(53)が挙げられている。「少なくとも私には」、「私だけに」そして「私のみならず他者も」のいずれもが(53)に可能である。

- (53) It is apparent – {at least to me / if only to me / to me and doubtless to others} – that the president has been lying to us about his motivations. Langacker (2011:202)

従って、“.....these sentences [本論の(53)を指す] both evoke a conceptualizer in generalized fashion and also situate the speaker with respect to this general viewpoint.”(Langacker (2011:202)), Impersonal It 文は一般的概念化者を喚起し、同時に話し手もこの一般的視点を持っていることを伝える文であると述べている。

3.2 Impersonal It文の “a generalized conceptualizer” : 提示的 There 構文との比較

本節では、Impersonal It 文において、概念化者は自身を“generalized conceptualizers”の一人として示すことができるとする Langacker の主張を別な言語事象から論証することを試みる。取り上げるのは “seem”等の動詞、そして Impersonal It 文と同じく非人称構文である There 構文である。

Huddleston & Pullum (2002:1390)は、There 構文に使われる動詞の種類によってこの構文を二つに分類している。Be 動詞が用いられる “the existential construction”と Be 動詞以外が使われる “the presentational construction”である。本論では、前者を存在的 There 構文、そして後者を提示的 There 構文と呼び議論を進める。

“Seem”は、Huddleston & Pullum (2002:1406-1407)が that 節を主語とする通常の基本文では不可で Impersonal It 文にのみ可能として挙げている第二の動詞群に属する動詞である。他には “appear, be, chance, come about, fall out, happen, strike, transpire, turn out”が挙げられている。そして、この “seem”は提示的 There 構文(6)にも生起する。

(6) There seems little doubt that the fire was started deliberately.

Huddleston & Pullum (2002:1402)

そのみならず Impersonal It 文と提示的 There 構文は次に述べる2つの点でも興味深い重なりを見せている。

第一点目は出現・認知という意味である。Impersonal It 文にのみ可能な第二群の動詞の中には(54-56)が示すように、事柄の出現・認知¹³を表す動詞が含まれている。同じく、提示的 There 構文に生起する動詞の多くも “being in a position, coming into view” (Huddleston & Pullum (2002:1402))、出現・認知の意味を表し、二つの構文に生起する動詞の意味は重なっている。

(54) It transpired that the King was dead. 『研究社新英和中辞典』下線は筆者による

(55) It often happens that as you examine a problem, further problems come to the surface.

¹³ “Seem”は Kiparsky & Kiparsky (1971:345)が非叙実動詞(non-factive)としてリストしている述語の一つであり、Kiparsky & Kiparsky (1971:346)は叙実動詞(factive)の場合には外置はオプションであるが、非叙実動詞では義務的(obligatory)であると述べ、(1-4)の例文を示している。

(1) 叙実動詞 That there are porcupines in our basement makes sense to me.

Kiparsky & Kiparsky (1971:346) 下線は筆者による

(2) 叙実動詞 It makes sense to me that there are porcupines in our basement.

Kiparsky & Kiparsky (1971:346) 下線は筆者による

(3) 非叙実動詞*That here are porcupines in our basement seems to me.

Kiparsky & Kiparsky (1971:346) 下線は筆者による

(4) 非叙実動詞 It seems to me that there are porcupines in our basement.

Kiparsky & Kiparsky (1971:346) 下線は筆者による

そして他の非叙実動詞として “appear, happen, chance, turn out” が挙げられており、これらは全て先ほど挙げた Impersonal It 文のみに可能な第二群の動詞に含まれている。

『研究社新和英大辞典』下線は筆者による

(56) It seems that he is sick.

そして、第二の繋がりは Impersonal It 文の “It” と There 構文の “There” が共通して持っている場面設定の働きである。Impersonal It 文の “It” の場面設定機能については 2.2 節で既に述べたとおりである。There 構文について高見・久野(2002:50)は次のように述べている。「There が、場所を示す句と共起したり、場所を示す句を予測させるという事実は、その両方で1つの場面が設定される(scene-setting)ことを示しているということを考えられる。そして、多くの研究者が指摘しているように、there 構文は、ある物を談話上設定された場面に導入する「提示文」として記述することができる(Quirk et al. 1985:1408)。」

このように、Impersonal It 文と提示的 There 構文は生起可能な動詞、事柄の出現・認知表現、場面設定機能という重要な点で重なりを見せている。この重なりから Impersonal It 文と提示的 There 構文を比較することは有意義であると考えられる。そして比較することによって Impersonal It 文の概念化者の姿を検討することができるのではないかと考える。ここでは両構文の情報構造に注目する。

情報構造を分析する角度の一つとして、①discourse familiarity status vs. discourse new status—談話における新旧情報と②addressee familiarity status vs. addressee new status—聞き手の知識における新旧情報を区別するという考え方があり、Huddleston & Pullum (2002:1368-1369)はこの区別を説明に用いている。“Discourse-old”情報は“addressee-old”情報でもあるが、“addressee-old”情報は必ずしも“discourse-old”情報ではない。例えば、米国における発話で“The President”が使われた場合、“discourse-new”であっても米国市民にとっては“addressee-old”情報ということになる。

Be 動詞が使われる存在 There 構文の情報の特徴は、談話に“addressee-new”な実体を導入することにある。従って、意味上の主語である名詞句は通常不定であり、定名詞句は適切ではない。不定冠詞+名詞句の(57)は適切であるが、定冠詞+名詞句の(58)は容認度が落ちる。

(57) There is a more serious flaw, however, in your own argument. Huddleston & Pullum (2002:1396)(58) #There is the more serious flaw, however, in your own argument. Huddleston & Pullum (2002:1396)

しかし、Be 動詞以外が用いられる提示的 There 構文の場合は、定である実体についての適切性条件が存在的 There 構文とは異なる。その違いを示しているのが(59)である。(59a-b)は“stand”を動詞に持つ提示的 There 構文と“be”動詞を動詞にもつ存在的 There 構文の両方が同じ振る舞いを見せている。両方とも不定の“a bodyguard”は適切であり、“discourse-old”である定の“the senators”は適切ではない。違いは(59c)である。“The Vice President”は“discourse-new”であるが、“addressee-old”である。存在的 There 構文には不適切であるが、提示的 There 構文には適

切である。従って、導入する実体について、存在的 there 構文は“addressee-new”を、提示的 There 構文はそれより緩い条件である “discourse-new”を求めるという性質を持っていることになる。

(59) President Clinton appeared at the podium accompanied by three senators and Margaret Thatcher.

提示的 存在的

- (a) Behind him there stood / was a bodyguard. 不定
 (b) #Behind him there stood / were the senators. 定=discourse-old
 (c) Behind him there stood / #was the Vice President. 定=discourse-new/addressee-old

Huddleston & Pullum (2002:1402)下線・付記は筆者による

この “discourse-new”という情報制約は、“discourse”という用語名が示しているように、特定の談話という枠内における話し手と聞き手の間の情報制約である。従って、提示的 There 構文では特定の談話内での話し手と聞き手の二者関係が焦点化されていることになる。

一方、Impersonal It 文は情報制約を持っていない。Huddleston & Pullum (2002:1404)は、情報制約は逆に基本文の方に課せられると述べている。(60B1-63B2)の下線部分は A の発話によって既に喚起されている事柄であり、話し手 B にとり “familiar”情報である。その場合、B1 の Impersonal It 文そして B2 の基本文の両方とも可能である。

(60) A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.

B1: It's a miracle that he did it at all.

Huddleston & Pullum (2002:1404)

B2: That he did it at all is a miracle.

しかし、新聞記事の冒頭文としての比較を示している(61)と(62)には違いがある。形容詞 “amazing”の驚きを伝える意味と新聞記事冒頭部分という特徴から、伝えたい事柄は聞き手にとり “new”な情報であると考えられる。この場合、Impersonal It 文(61)は適切であるが、基本文(62)は容認度が下がる。

(61) It is amazing that the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France.

(62) #That the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France is amazing.

Huddleston & Pullum (2002:1404)

基本文の場合、主語位置にくる内容節で表されている事柄には既知性が求められるが、Impersonal It 文の場合にはそのような情報制約が無い。

従って、提示的 There 構文(63)と Impersonal It 文(64)は共に、概念化者の姿が言語化されていないという共通点を持つが、次の違いを示せる可能性が考えられる。“Discourse-new”という情報制約を求める提示的 There 構文(63)は談話における聞き手に対する自分という立場での概念化者の姿を表している。一方、そのような情報制約のない Impersonal It 文(64)は、その文のみでは、概念化者の立ち位置を明らかにしていない。聞き手はその姿を “a generalized conceptualizer”として捉える場合もあり得ることになる。

(63) 提示的 There 構文 : There seem to have been made a big mistake in the document.

(64) Impersonal It 文 : It seems that a big mistake has been made in the document.

Impersonal It 文にのみ可能な動詞群は二種類であった。2 節で検証した不定詞を目的語にとる動詞群の受動化からは “a generalized statement”という Impersonal It 文の事柄の捉え方を抽出した。そして本節ではさらに考察を進め、もう一つの動詞群の一つである “seem”等を取り上げ、提示的 There 構文との情報制約比較から Impersonal It 文が “a generalized conceptualizer”を示すことができることを述べた。

4. 結論

概念化者は異なる言語形式を用いることにより、どのように事柄の construal を示すかそして概念化者自身をどのように提示するかを選択を持っている。本論¹⁴は Impersonal It 文もその言語形式の一つであると考え、Langacker (2011)が主張している Impersonal *it* の意味の一つ “a generalized conceptualizer”を検証し、その妥当性を Impersonal It 文の 2 種類の語彙的特徴を考察することから示すことを目的とした。分析結果は以下のとおりである。

2 節では Impersonal It 文の語彙的特徴の一つであるこの文にのみ可能な不定詞を目的語にとる動詞の受動化に焦点を当てた。

2.1 節では受動態の特徴と不定詞の性質を比較した：①受動態の主語を動機づける高い具象性・特定性が “grounding”されていない不定詞には不足していること、②動作主の姿を低める受動態の機能と不定詞を目的語にとる動詞の一つの傾向である精神活動行為表現が一致していないこと、③それらの動詞が示す figure/ground の非対称性が十分ではなく有標の受動態主語として選択適切性が劣ること、④真の受動態が表現可能な行為過程をゲシュタルト・サマリー性を持つ不定詞には示すことができないことを示した。これらの一致しない性質により基本語順文では不定詞が受動文の主語となりにくいことを説明した。

2.2 節ではこれらの相いれない性質が Impersonal It 文ではどのように組み入れられている

¹⁴ 東京大学教授西村義樹氏及び青山学院大学教授田辺正美氏より数々の貴重なご助言を賜り、心より感謝申し上げます。但し、文責は全て筆者に帰するものである。

かを見ることによりこの文の construal を考察した。

まず、不定詞に欠けている発話と発話の場を繋ぐ “grounding” 性質については、“It” の持つ “field” で補われていることを述べた。この性質は指示代名詞の “It” からの拡張と考えられる性質である¹⁵。

ついで、受動態の機能である動作主を低める性質と不定詞をとる動詞が持つ actor (動作主/経験者) 提示傾向の不一致が Impersonal It 受動文で緩和されることから、Impersonal It 文は actor の姿を低めた捉え方 “actor defocusing” と密接に関係していると考えざるをえないこと、そして、actor を低めた捉え方ができる場合に Impersonal It 文が可能になることを示した。そこからこの文自体が “actor defocusing” という construal を表すと考えられることを述べた。

そして次に不定詞のスキーマであるゲシュタルト・サマリーの働きに注目した。特定の動作主を低め事柄をゲシュタルト・サマリーとして示すということは、その事柄が持つプロセスを背景化させ、プロセスが背景化されることにより個別性を失い、その事柄は一般性を示すことになる。そこからこの文は事柄を一般化(a generalized event)して示す “a generalized statement” という construal を表せることを述べた。そして、不定詞を意味上の主語として持つ Impersonal It 受動文は Impersonal It 文の大きな特徴であり、この受動文が示す “a generalized statement” は Impersonal It 文自体の construal – “a generalized statement” と呼応していることによるものと考えられることを述べた。

3 節ではこの “a generalized statement” について概念化者の位置づけという点から分析を行い、Impersonal It 文において概念化者は自身も一般的概念化者の一人 “a generalized conceptualizer” として提示することができることを示した。まず、3.1 節で先行研究である Langacker(2011)の主張を説明した。

3.2 節では Impersonal It 文の語彙的特徴の二つ目であるこの文にのみ生起可能な動詞 “seem, appear, be, chance, come about, fall out, happen, strike, transpire, turn out” を取り上げることに より Impersonal It 文の “a generalized conceptualizer” を示すことを試みた。この中の “seem” は同じく非人称構文である提示的 There 構文にも生起する動詞であり、両構文には出現・認知の意味表出、場面設定という重なりが見られることから二つの構文を比較する有意性があることを示した。その上で、両構文の情報制約を比較し、“discourse-new” という情報制約を持つ提示的 There 構文は特定の談話における話し手としての概念化者の姿を示し、一方、情報制約のない Impersonal It 文では概念化者は自身を “a general conceptualizer” として提示することが可能であると考えられることを述べた。

以上の分析結果から、本論では、Impersonal it が指示的意味を持っていること、その意味の一つとして “a generalized conceptualizer” を示すことができることを主張した。

¹⁵ “It” によって枠組みされることにより figure/ground の非対称性が高まる可能性、It 分裂文との構文的類似性が何らかの影響を与えているのではという今後の研究課題を示した。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1974) "On the passive in English." *LACUS* 1, pp. 57-80.
- ポリンジャー, D. (1981) 中右実 (訳) 『意味と形』東京: こびあん書房.
- Cureton, R. D. (1979) "The Exceptions to Passive in English." *Studies in the Linguistic Sciences* 9: 2, pp. 39-53.
- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford/New York: Oxford.
- Gundel, J. K., Hedberg, N. and Zacharski, R. (1993) "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse." *Language*. Volume 69. Number 2. pp. 274-307.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas (1998) "Some Referential Properties of English *It* and *That*." In: Akio Kamio & Ken-ichi Takami (eds.) *Function and Structure in honor of Susumu Kuno*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 289-315.
- 『研究社新英和中辞典』Online: 研究社.
- 『研究社新和英大辞典』Online: 研究社.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1971) "Fact" In: Danny D. Steinberg and Leo A. Jakobovits (eds.) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. London/New York: Cambridge University Press. pp. 3345-369.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』東京: 大修館書店.
- 久野暲・高見健一 (2002) 『日英語の自動詞文』東京: 研究社.
- 久野暲・高見健一 (2005) 『謎解きの英文法 文の意味』東京: くろしお出版.
- 栗原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』東京: 研究社.
- Langacker, R. W. (1982) "Remarks on English Aspect." In: Paul J. Hopper (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 265-304.
- Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Volume I /II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2002) *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2007) "Constructing the meanings of personal pronouns." In: Radden Günter, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 171-187.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, R.W. (2011) "On the subject of impersonals." In: Brdar, Mario, Stefan Th. Gries and Milena

- Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*. Cambridge/London: The MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Shibatani, Masayoshi (1985) "Passives and Related Constructions." *Language*. Volume 61. Number 4. pp.821-848.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較—受身文・後置文の分析—』東京：くろしお出版.
- 高見健一・久野晋 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.

A Generalized Conceptualizer in the Impersonal *It* Construction

Kumiko Yumoto

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

Keywords: Impersonal *It* construction, A generalized conceptualizer, Infinitival, Passive, Presentational *There* Construction

Abstract

The purpose of the present paper is to argue that the impersonal *it* is referential and is able to imply a generalized conceptualizer. I will explore a conceptualizer in the "Impersonal *It* construction", which is often called "it-extraposition." In order to prove that the construction shows a construal of actor-defocused events and is a generalized statement, I will analyze the lexical feature that some verbs only occur in the Impersonal *It* passive construction with an infinitival in post-verbal position (e.g. "*To short-list three of the candidates was decided.", "It was decided to short-list three of the candidates.) Then I will claim that the construction shows a generalized conceptualizer by investigating another lexical feature of the construction that some verbs occur only in the Impersonal *It* construction without an equivalent version where the subordinate clause appears as subject (e.g. "*That everything is fine seems.", "It seems that everything is fine.") For this purpose, I will attempt a comparison of the information structure of the Impersonal *It* construction and the presentational *There* construction. These findings are in accordance with basic principles of Cognitive Grammar, wherein the impersonal *it* is claimed to be meaningful.

(ゆもと・くみこ 青山学院女子短期大学)

